# 石田さんに答えて

まず，冒頭で白状したように，こうした問題に無関心に近かった私の書いた小論を正面から批判していただけたことにお礼を申し上げて，答えになるか，言い訳になるか分からないが若干書きつけてみたい。

第13号のシンポジウム関係の論文は，私のものに限らず，シンポジウムの講演記録であって，御一人を除いては新らたに書き起こされたものではない。したがって，講演はシンポジウム・オーガナイザーからの要請に沿って行われたことをまずお断りしておく。村上さんから私への講演依頼は「**これまでのわが国**での鳥の生物指標に関する仕事を紹介して，多少のコメントをしてくれ」というものであって，「生物指標の有効性について教科書的なことを語ってくれ」というものではなかった（もちろん，教科書的が悪いと言っているわけではない）。

いま，石田論文の主な論旨を乱暴ではあるが私なりにまとめてみると，「生物指標は**これこれこのようにやれば**山岸が言うほど無価値なものではないはずだ」ということだとすると，実は私もそう思っているので，その点では石田さんとあまり喧嘩にはならないのである。ただ，いみじくも石田さんが文中で述べておられるように，この方面の素敵な研究がわが国では私には見当たらなかったので，ああしたかなり悲観的な一文になったわけである。

今後大切なのは教条的なことを言い立てることではなく，「**これこれこのようにやれば**」という部分を実際にやってみることではあるまいか。あまり他の人のことを言うと角が立つし，石田さん御自身もこの方面に多少の興味をおもちのようなので，あえて石田さんに関係したキツツキ類の生態に関する部分でものを言わせてもらえば，最近の東京都心部へのキツツキ類の侵入にしても，侵入先のどのような群集構造の中で，何をどのように食っていて，それは原生林でのキツツキのそれとどのように異なっているのかということを，御自身の仕事で明示されることが少なくとも肝要なことだと私は思うのである。

タンポポや水棲昆虫が指標生物として価値が高いと言われるその背後には，タンポポの生態を研究して学位をとられた研究者が１ダース以上もいるという話だし，水棲昆虫に至ってはその数は数え切れないそうだ。こうした純粋な学問的裏づけの上に立って初めて指標生物としてどのように扱うべきかが多少わかってくるのであって，それを思えばわが国でのこの方面での鳥の研究は思うだに空恐ろしいほど遅れていると言わなければならない。石田さんを初め若手の活躍が熱望される由縁でもある。

それから石田さんの諸提案に使われた例であるが，やはりアメニティーに関するものが多く，私の主な関心である動物生態学（石田さんの言う基礎的な研究）に関する提案は目新しいものがないように私には思える。せっかくの石田さんの提案に水をさすような文になってしまったが，こうした教科書的な提案でも，それが新しければ私は大いに価値があると思っている。石田さんのオリジナルな部分と，これまで言い尽くされて来てしまった部分をもう少し明確にしていただければ，更に説得力が増しただろうと思っている。

最後に，「鳥は翼があるため移動力が強く，あまり移動力のない水棲昆虫や動かない植物と違って，その生活空間が広く，その中に多種多様な異なった目的に使われる環境要素を含むため，環境の分析が一筋縄ではいかず，やはり指標生物としてはあまり適さないのではないか」という私の考えは石田論文を読んだ後の今も変わっていない。

おそらく，村上さんはこのような論議があの場でなされるのを期待されたのだと思うが，残念ながらあの折りには多くは出なかった。遠い東京から貴重なご意見が頂けたことをあらためて感謝し，答えになっていないかも知れないが私の思いの一端を記してみた。

（大阪市立大学理学部生物学教室・山岸哲）